

1. 久里双水古墳

この古墳は、唐津地方最大の全長108.5を測る前方後円墳です。

前方後円墳というのは、古墳時代の有力者のお墓で、上から見ると方形（前方）円形（後円）を組み合わせた巨大な鍵穴の形をした墳墓で、大阪府の応神天皇陵とか、仁徳天皇陵などが有名で、



英語では **Keyhole-Shaped Tomb** などとも呼ばれる日本独特のもので、世界では日本と韓国の一部にしかありません。韓国のは日本から伝わったもので、数も限られています。日本では沖縄や北海道、東北の一部を除いて各地に沢山残っています。

久里双水古墳もそのうちの一つですが、有名になったのはこの古墳が造られたの時期が、大変早い時期の3世紀末から4世紀初頭の頃のものであると考えられるからで、調査が始まったころは、前方後円墳の最も早いものだとさえ言われたものです。

前方後円墳は、一般には奈良県の箸墓古墳をもって最初のもと言われていますが正確ではありません。確かに定型化した前方後円墳は箸墓古墳が最も古いものと考えられていますが、前方後円形をした古墳が箸墓古墳より先に、箸墓古墳のある奈良県の纏向地方に幾つか作られていたと考えられています。纏向石塚古墳、纏向矢塚古墳、ホケノ山古墳などです。これらは纏向型前方後円墳と呼ばれ、奈良県以外の九州や、千葉県等にもあるとする研究者もいます。

この纏向型とは少し異なる前方後円形の古墳が、箸墓古墳以前に九州や四国、などでも造られています。九州では福岡市の那珂八幡古墳もその一つだと言う研究者（久住猛雄氏 1人）がいます。那珂八幡古墳の流れを汲むと思われる幾つかの古墳もあるとのこと。これらは、先ほどの纏向石塚古墳などより少し後に造られたと思われるので、おそらく纏向型前方後円墳の影響を受けていると思われませんが、前方部と後円部の径と前方部の長さの比が纏向型前方後円墳と少し異なりますので、前方後円墳は多元的に各地で発生したのではないかと考える人もいますようです。中には前方後円墳は九州で発生したと主張する人もいますが、いささか行き過ぎた主張でしょう。

箸墓古墳以前のものに、その他岡山県の楯築古墳があります。この古墳は、円形の両側に方形がついた双方中円墳と呼ばれるもので、前方後円墳の祖源だとする研究者もいます。また東部瀬戸内沿岸や大阪湾沿岸には弥生時代末に造られたもので、周溝墓に通り道を付けた墳墓（前方後円形に近い形）があり、これらが前方後円墳に発展したと考える研究者もいます。前方後円墳の起源については、未だ定説はなく今後も議論が続くことでしょう。

前方後円墳の起原はさておき、箸墓古墳以降に大和を中心とする畿内で巨大な前方後円墳が次々作られ、これらの影響を受けた前方後円墳が全国に波及していきます。

但し、初期の大和の前方後円墳祭祀には、九州や瀬戸内の伝統的な祭祀要素も見られ、前方後円墳が大和勢力のみで造り出したものではないと主張する研究者もいます。

久里双水古墳は、那珂八幡古墳の形態とは明らかに異なり、竪穴式石槨（石室）という九州では外来の埋葬施設を採用していて、在地の伝統的埋葬習慣を残しながらも、畿内の前方後円墳の影響を受けていると考えられます。

2. 菜畑遺跡・末蘆館

縄文時代前期～弥生時代中期に及ぶ遺跡です。この遺跡を有名にしたのは、日本最古の稲作（水稻）遺跡が発見されたことです。写真上は復元された稲作跡で、現在とあまり変わりません。この稲作跡は縄文時代晩期後半（BC500～600年）のものと考えられ、縄文時代に既に水稻栽培が始まっていたことになります。学校では稲作は弥生時代に始まったと教わりましたが、古い知識はもう役立ちません。最近では縄文、弥生の時代区分の議論が活発になっているようです。これについては、この後に考えてみたいと思います。遺跡に隣接して設けられた資料館は、末蘆館と呼ばれ、ここで発掘された遺物を中心に多くの考古資料が展示されています。



写真下は日本最古の石包丁で、稲の穂を刈り取るのに使用されたと考えられます。表面が綺麗に磨かれており、いわゆる磨製石器と呼ばれるものです。

<追記>

九州の縄文・弥生土器の編年は次のようになっています。

黒川式→山の寺式→夜臼Ⅰ式→夜臼Ⅱa式→夜臼Ⅱb式→（縄文土器）

板付Ⅰ → 板付Ⅱa →・・・後省略（弥生土器）

従来、板付遺跡で稲作遺構を伴う板付式土器と夜臼式が共伴したため、この時期を稲作開始時期とみて、弥生時代の始まり（弥生前期）がBC300～BC400頃と考えられていましたが、菜畑遺跡で稲作遺構と共に、夜臼式よりさらに古い、山の寺式土器が出土したため、新たに弥生早期という時代区分が設けられ、BC400～BC500とされました。

しかし国立民族博物館は、出土した山の寺式土器に付着していた炭化米のC¹⁴分析からBC900～BC1000と弥生時代開始を、さらに大幅に遡らせ、議論を呼んでいます。

早期（先Ⅰ期）		前期（Ⅰ期）			中期（Ⅱ - Ⅳ期）				後期（Ⅴ期）			
早期前半	早期後半	前期前半	前期中葉	前期後半	中期前半	中期中葉	中期後半	後期前半	後期後半			
縄文 晩期					弥生 早期	弥生 前期	弥生 中期	弥生 後期	弥生 終末			
前1000	前900	前800	前700	前600	前500	前400	前300	前200	前100	0	100	200

（1 段目及び 2 段目は、歴博提起の新年代を示す。）

3. 谷口古墳

4世紀末ごろの築造と考えられる全長77メートルの前方部が低い古式の前方後円墳です。この古墳が注目されるのは、竪穴式石室とされていた後円部に二つある埋葬施設が、最古の竪穴系横口式石室というタイプの横穴式石室であったことと、夫々の石室に畿内で盛行した長持形石棺が埋納されていることです。

竪穴系横口式石室というのは、竪穴式石室の小口に入口を設けた形のもので、入口と室内の床面に大きな段差があります。この谷口古墳も石棺を運び入れるから、入口の石を積み増して入り口わざわざ高くしています。

横穴式石室は、中国大陸や朝鮮半島の影響を受け4世紀末から5世紀初頭頃に北部九州や肥後で造られはじめ、やがて各地に広まりますが、畿内での採用は約1世紀ぐらい遅れます。発生の過程については様々な見解が出されていますが、初期のものには、谷口古墳のような竪穴系横口式石室の他に、北部九州型や肥後型と呼ばれるものがあり、一つのものから分化したのではなく、幾つかのタイプのものが、ほぼ同じ頃に同時に発生したのではないかと思います。

横穴式石室は追葬を前提としたものが多くて、棺を用いるのは極めて少なく、例えば棺を用いても追葬が容易な棺を用いますが、この谷口古墳は追葬は全く念頭に無いようです。何故なら後円部に埋葬施設を二つ作り、さらに前方部にも舟形石棺で埋葬しているからです。

長持形石棺は、形が昔の嫁入り道具の長持に似ていることから名付けられたものです。丁寧に加工された板石を組み合わせた組合式石棺で、畿内の大王墓と考えられる古墳や有力者の墓と考えられる大古墳でも確認されており、精美な形と相まって王者の石棺とも呼ばれ畿内を中心に分布するもので、他の地域では数が少なく、九州では谷口古墳の2基の他には筑後のうきは市の月岡古墳の1基しかありません。

谷口古墳のものは、正確には典型的な長持形石棺でなく、類長持形石棺（長持形石棺類似の石棺）とも呼ぶべきものですが、小口部の縄掛突起の様子などは長持形石棺の特徴をよく表しています。石室内にの实物は、写真に撮れませんので、下のレプリカの写真を見て下さい。（次ページ）写真下は石室入口で、下の方にほのちょっと赤っぽく見えているのが实物の石棺です。

この古墳が造られたころにはすでに、九州では刳拔式石棺（舟形石棺）が広まっているので、本来なら刳拔式石棺を使うべきはずですが、わざわざ長持形石棺の製作工人を招聘してまで長持形石棺を作らせるということは、横穴式石室という新しい外来の埋葬施設を導入しながらも埋葬思想は全く畿内的であることを意味し、被葬者とその集団の性格を論じる上で重要なことだと思えます。



長持形石棺は、その祖型と考えられるものが、河内（松岳山古墳）や山城（妙見山古墳）、吉備（花光寺山古墳）等にありますが、その後の定型化の過程をみると畿内が発祥と考えられます。なお先述の谷口古墳の長持形石棺も長持形石棺に先行するものの一つと考える研究者もあります。なお松岳山古墳の石棺は、一部が讃岐の石材です。



<追記>

この谷口古墳の石棺は、上記のように長持形石棺定型化以前のものだとの見解がありますが、私はこの石棺が作られた時期にはすでに長持形の定型化進んでおり、長持形石棺の省略型だと思います。小口の縄掛突起は既に長持形石棺そのもので、長側辺の縄掛突起が省略されているとみるべきだと思います。

4. 樋の口古墳

5世紀末の築造と考えられる直径30mの円墳です。埋葬施設にこの地方では珍しい肥後型の横穴式石室を採用しています。肥後型の横穴式石室の特徴は、穹窿型の天井と玄室（遺体を納める部屋）の四周に腰板のように石障を巡らすものです。石障とは、加工した板石の仕切りのことで、玄室の壁や屍床（遺体を置く場所）の前に設置されます。（写真下が石障です。）ある研究者によれば、石障は南肥後が発祥（八代海沿岸 小鼠蔵1号墳など）とのことです。案内をして下さった唐津市教育委員会の方は、この樋の口古墳の横穴式石室は、八代市の田川内1号墳の石室に類似するとのことでしたが、若干雰囲気が違うように思いました。（田川内1号墳は石障に彫刻を施したりして、より丁寧な造りに思えます。）



被葬者は、肥後の出身かあるいは肥後と格別な関係のある人物と想定されます。肥後勢力の進出と考える人もあるようですが、些か早計に過ぎると思います。肥後勢力の進出なら、他にも同様の石室を持った古墳があっべきですが、他には見当たらないようです。想像をたくましくして推論すれば、朝鮮半島などとの通商にこの地の港を使用していた南肥後の有力者が、半島もしくはこの地で急死し葬られたのではないかと考えられます。何故なら門柱石に石棺の半製品と思われる石材が転用されており、急遽古墳が造られたのではと推定されるからです。

5. 正観寺石棺

唐津市鏡地区の正観寺境内に丁寧に安置されている剝抜式舟形石棺です。以前はこの寺の裏山に置かれていたようです。石棺は、案外ぞんざいに扱われ、野ざらしのものが結構あって、心が痛むのですがこのように大切にされているとホッとします。何処の古墳から出たのか不明ですので、正観寺石棺（以前は正観寺裏山石棺）と呼ばれています。棺蓋だけで、棺身の方は行方不明です。どういう意図か裏向きに置かれています。



この石棺の特徴は、長手方向の辺（長側辺）の左右に、断面が方形の縄掛突起が3個ずつ付いていることです。写真では一部がなくなってしまうとよくわ

かりませんが、間違いなく3個ずつ付いています。長手方向に3個ずつ縄掛突起の付いた石棺が唐津市にもう一つあります。島田塚という古墳の横穴式石室内にあるものですが、こちらの方は棺身のみ残っています。島田塚古墳の築造されて時期には、九州ではもう横穴式石室の中に石棺を置く習慣はなくなっているはずですので、本来は島田塚古墳の石棺ではないと思います。後世に運び込まれたと考えられます。

長手方向に縄掛突起のある石棺は、結構あるのですが、3個あるのはそう多くありません。私の知る限り、上記の、正観寺石棺、島田塚古墳石棺の他、大分県臼杵市の臼塚1号棺、宮崎県延岡市平原古墳石棺、熊本県八代市の室ノ山1号、2号墳石棺です。熊本県のもは環状突起という半円形の環の形をした肥後南部に特有な形のもので、長手方向の縄掛突起については後日にして、石棺について少し書いてみます。

石棺は製作方法によって、組合せ式石棺と剝抜式石棺に、外形から箱式石棺、長持形石棺、割竹形石棺、舟形石棺、家形石棺に分類されます。割竹石棺は舟形石棺に含められることがあります。

組合せ式石棺は板石を組み合わせて作るもので、箱形石棺、長持形石棺、家形石棺があります。あまり加工を加えない板石を箱形に組み合わせたものが組合せ式箱形石棺で、多くの場合底板はありません。九州では弥生時代から用いられているものです。中には底板のあるものや、その底板や蓋板に溝を彫って側板を嵌め込むものもあります。長持形石棺は、先に谷口古墳で紹介したように、丁寧に加工した板石6枚を嵌め込み溝を穿つなどして堅固に組み合わせたもので、屋根は多くの場合蒲鉾形で、前後（木口）や長手方向に縄掛突起が付きます。側版の組合せは、必ず長手方向の板で、小口の板を挟むように組み合わせるのが特徴です。側版や底板を組合せて、蓋石に屋根形に剝いたものを用いたものが組合せ式家形石棺です。九州の組合せ式家形石棺は底板のないものが多いようです。組合せ式家形石棺のには、小口や長手方向の側板に出入り口を設けたものが九州には幾つかあります。前者を妻入り横口式と言ひ、後者を平入り横口式

と呼ばれています。また九州では、横穴式石室の奥壁に設けられた石屋形が多くみられますが、これは平入り横口式が変化したものと考えられています。この横口式の石棺や石屋形は横穴式石室とともに九州外にも伝播しています。

刳抜式石棺は、石材を刳り抜いて作るもので、割竹形石棺、舟形石棺、家形石棺があります。割竹形石棺は文字通り竹を二つに割ったような断面をしたものです。舟形石棺は棺身が船のようになったものが多いので名付けられたもので、棺蓋は蒲鉾状のものや、屋根形のもの、平べったいものなどさまざまですが、要は棺身が箱形でないものを総称して舟形石棺と呼んでいます。刳抜式の家形石棺は、棺身が断面方形で、棺蓋が屋根形をしたもので、古墳時代後期に畿内で盛行したものです。中肥後で真門石というピンク色をした石材（ピンク石）で造られ、吉備や畿内に運ばれた棺身が箱形に近い舟形石棺が元になったと言われていいます。

石棺は、木棺を模倣したものだと言われていいます。舟形石棺の早い時期ものは、讃岐や、北肥後、南肥後、にあります。以前は、香川県の快天山古墳石棺と福岡県沖出古墳石棺が類似している（割竹形）ことから、讃岐のものが九州に伝わったと言われていましたが、沖出古墳石棺より早いものが肥後にもあり、また丹後の蛭子山古墳にも、早い時期の石棺があります。石棺が木棺の模倣であれば、同じような時期に多元的発生したとも考えられます。ただ肥後の石棺に、讃岐の石棺の製作技法が見られという研究者（石橋宏氏）もあり、さらに検討が必要でしょう。

6. 釜塚古墳

5世紀前半に築造されたと考えられる直径56メートルの大型円墳です。墳丘を取り囲む周溝は、巾8メートルと言われていいますので、周溝を含めると72メートルもの超大型古墳です。しかもこの古墳は湿地帯に築造されていますので、難工事だったでしょう。

この古墳の特徴は、初期の横穴式石室（写真上右）が確認されていることと、国内最古の石見型木製品（石見型木製埴輪 写真下左）が出土したことです。

横穴式石室は、横穴式石室が始まった頃の古いもので、玄室入口の両側に板石を立てています。短い羨道がついているようですが、はっきりはわかりません。

（羨道はなく、玄門の天井石がはみ出ししているだけとの見方もあります。羨道は、天井石がある通路をいいますので、天井石が無ければ墓道になります。）墓道、正確には前庭というそうですが、「ハ」の字に開いています。国立民族博物館の加部二生氏によると、前庭の付いた横穴式石室は、福岡県の鋤崎古墳が最も早いらしく、高句麗の石室の影響を受けているとのことですが、鋤崎古墳は、最初期の横穴式石室なので、鋤崎古墳は渡来系の工人によって造られたことにな



りそうです。玄室奥壁の付近に板石が残っており組合せ式箱形石棺があったようです。残念ながら石室は埋め戻されており、実際には見る事が出来ませんので実測図から想像するしかありません。

写真の石見型木製品は、レプリカですが、このような形で建てられていたのでしょうか。石見型の名称の由来は、奈良県の岩見遺跡から写真によく似た埴輪（木製品ではない）が初めて発見されたことによります。その後同じような埴輪が畿内を中心に次々発見され、埴輪の他にも類似の形をした木製のものも発見されました。木製のものは石見型木製埴輪とも言いますが、学術的には石見型木製品と呼ぶようです。



この埴輪や木製品が何を表象しているのかについては、「儀仗」とする人が多いのですが、未だ定説にはいたっておりません。

似たような形のものに、琴柱型製品があり、それとの関連を指摘する人がありますが、大きさの問題もあってよくわかりません。

埴輪と木製品のどちらが早いのかというと、現在のところこの釜塚古墳の木製品が埴輪より早く、木製品から埴輪が出てきたと考えられています。だとすると、石見型埴輪のルーツは九州ではない

かと九州の人たちは喜ぶかもしれませんが、残念ながら違うようです。写真下右は、松阪市教育委員会の許可を得て転載した松阪市宝塚1号墳から出土した舟形埴輪の写真です。このように実際に存在したものを模った埴輪を形象埴輪と呼びますが、この古墳が造られたころに実際にこのような形をした木造船が存在したことを物語っております。よく見ると、石見型木製品と同じものが2本あり、右側のものは釜塚古墳とよく似ています。宝塚1号墳が造られた頃には、このような木製品がすでに存在していたことがわかります。釜塚古墳と宝塚1号墳の築造時期を比べると宝塚1号墳の方が少し早いようですので、九州より畿内周辺にあたる伊勢地方に先にこのような木製品が出現していたこととなります。

繰り返しますが石見型埴輪は、釜塚古墳の石見型木製品より後に出現しているようで、石見型埴輪は石見型木製品が元になっているようです。

石見型木製品や石見型埴輪の出土状況を見ますと、何れも畿内とその周辺が分布の中心で、木製品に関しては、殆どが奈良県に集中しています。特に橿原市四条1号墳では27体、桜井市小立古墳では13体出土しています。（埴輪の方は大阪府が多いようです。）一方九州では木製品は釜塚古墳の1体のみで、埴輪は全くありません。その代り石見型の石製品がありますが、数例に過ぎず時期もずっと後のものです。



畿内で最も早いものは小立古墳のものですが、こちらは釜塚古墳のものより後の時期のものですが、形がよく似ており研究者同一タイプに分類しているようです。おそらく釜塚古墳や小立古墳に先行するものが、畿内かその周辺で最初に作られたと考えられます。

なお面白いことに、韓国光州市の月桂洞1号墳からもこの石見型木製品が笠形木製品と共に出土しています。この古墳の石室は、いわゆる九州型石室なのですが、その周辺に九州では珍しい石見型木製品が立てられていたことをどう解釈するのか興味ある課題です。

<追記>

この記事を書いた後、宮木貴文氏の修士論文(別府大学)『九州地方におけるいわゆる石見型製品の研究』の中に、石見型に類似する形状の付属物が付いた家形埴輪に触れた個所があったのを思い出しました。葛城市の寺口和田1号墳から出土した家形埴輪で、正面入口の中央に辟邪を示すように作られています。この古墳の築造時期は、4世紀末から5世紀初頭と考えられています。

また京都府精華町の鞍岡山3号墳出土の円筒埴輪の線刻された船に石見型木製品が見られます。この古墳の築造時期も4世紀末から5世紀初頭の様です。その他奈良県東殿塚古墳出の円筒埴輪に線刻されて船にも石見型木製品ではないかと思わるるものがあります。こちらは4世紀初頭築造と考えられる古い古墳ですので、石見型ないし類似のものがすでにこの頃に畿内に出現していたこととなります。



石見型埴輪



寺口和田1号墳家形埴輪



鞍岡山3号墳線刻円筒埴輪



2. 1号船頭

東殿塚古墳円筒埴輪

7. 糸島高等学校博物館

在野の考古学者として有名な原田大六氏の出身校にある博物館です。原田大六氏の在校中から生徒たちによって発掘された遺物を収蔵展示したユニークな博物館で、貴重な資料が数多くあります。今回私が長年見たかった長須隈古墳出土の舟形石棺があり、感激の対面でした。写真を撮らせてもらうことが出来ました。

生徒たちの考古学研究も盛んなようで、丁度見学した時は「狛犬」の編年研究がパネルにありました。高校生徒とは思えない、なかなかのものです。

写真は、多分一貴山銚子塚古墳から出土した水銀朱だと思えます。記憶が鮮明でないのでもしかすると違うかもしれませんが、水銀朱であることは間違いありません。ベンガラと違って鮮やかな朱色です。博物館を巡っても水銀朱にはめったにお目にかかれません。

長須隈古墳舟形石棺について少し書きます。この石棺は、長手方向（長側辺）の左右に1個ずつ縄掛突起があります。舟形石棺の長手方向の縄掛突起は舟形石棺が生まれた最初の頃にはありません。5世紀の初頭ぐらいに始めて現れます。九州で最も早い時期のものと考えられるのは、この長須隈古墳石棺の他に、大分県臼杵市の臼塚古墳1号棺、福岡県大牟田市の黒崎山古墳石棺があります。このうち、黒崎山古墳石棺（正式名称は黒崎山舟形石棺で、黒崎山古墳という古墳はありません。）は、黒崎山公園整備中に発見されたもので、出土古墳が明確ではありません。したがって製作された時期も本当ははっきりしません。面白いことに長手方向の縄掛突起はどちらも断面が円形でなく、臼塚の方は少し扁平ですいずれも方形なのです。臼塚古墳には有名な石人の古いものがあり、大牟田市にも石人の古いものがあります。どちらがより古いかは簡単には決めかねますが、石工の交流があった可能性があります。長須隈古墳石棺の長手方向縄掛突起は断面は円形ですので、直接の関連はうかがわれません。

この長須隈古墳石棺の棺蓋をよく見ると長手方向の縁が突帯状に張り出しています。このような造りは肥後の舟形石棺によく見られますが、肥後のものは頂部が屋根形で、こちらは蒲鋒形に近い作りです。唐津・糸島地方には石棺は多くありません。しかも最初に導入したのは、谷口古墳の長持形石棺です。そこで大胆な推論ですが、刳抜式石棺の製作も長持形石棺の製作工人が行ったものではないかと考えられます。他に福岡市西区の丸隈山古墳石棺の蓋板も長持形石棺工人の関与が考えられると著名な研究者が言っています。（柳沢一男氏、辻田淳一郎）糸島と西区はそう離れていません。刳抜式石棺の先進地の肥後の石棺をモデルにしたものの、長持形石棺のイメージに引きずられ或



いは長持形石棺に憧れて、その頃すでに定型化していた長持形石棺の長側辺の縄掛突起



を採用、蓋板の頂部もカマボコ型にしたのではないのでしょうか。縄掛突起の形状は、長持形石棺のそれに酷似しています。

以前、「長側辺に付く縄掛突起」という文を書いたことがあり、長側辺の縄掛突起は長持形石棺の影響であると書きましたが、今回長須隈古墳石棺を見て間違いないと確信しました。

なお、唐津糸島地方には舟形石棺はそんなに多くありません。

にもかかわらず、既述のように正観寺石棺、島田塚古墳石棺、長須隈古墳石棺と、何れも長側辺に突起がある石棺です。舟形石棺の長側辺の突起は、この地方で始まったのではないかと思います。残念なことに長須隈古墳石棺を除いて、製作時期がはっきりしませんので、自信をもって言い切れません。



8. 平原遺跡と 伊都国歴史博物館

平原遺跡は、弥生時代後期から晩期にかけての墳墓群です。隣接した伊都国歴史博物館、はこの遺跡で出土した遺物を中心に貴重な資料が収蔵展示されています。

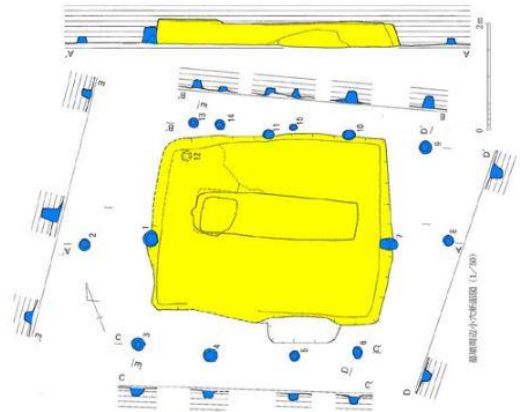
1号墓（写真上）は特に有名で、伊都国王の墓ではないかといわれています。以前見た時はこのように綺麗には復元されていませんでしたが、今は方形周溝墓として復元されています。方形周溝墓というのは、一般的には埋葬施設の周りに、方形に溝を巡らせた墓で、低い墳丘を持つものもあるとされていて、方形低墳丘墓とも呼ばれます。しかし、同じ周溝を持つ墳墓でも、先に埋葬施設を造造



り埋葬を終えてから後に周溝と墳丘を作る場合と、墳丘と周溝を作った後で埋葬施設を造って埋葬する場合には埋葬の意義が異なるように思えるのですが、どちらの場合も方形周溝墓と呼んでいるようです。これについてはまた別の機会に書いてみたいと思います。

この1号墓が有名なのは、国内最大の直径46.5cmもある超大型内行花文鏡5枚を含む鏡が40枚も出土したことです。出土数も国内最多です。写真上右が、内行花文鏡です。そのほか素環頭太刀や玉類なども出土しており国宝に指定されています。また墓壇の周囲に12個の柱穴が確認されていて、墓壇の中心軸に近い短辺側の二つの柱穴とその外側1mくらい離れたところの2つの柱穴の4つの柱穴を結んだ線の延長線上にも大柱穴（井戸との説もある。）があり、その延長上に日向峠があり、大柱穴から見て東南に方向にあたることから、太陽信仰との関係を考える人もあるようです。

伊都国歴史博物館で特に特筆したいのは、三雲・井原から出土した楽浪土器と硯です。前者は、楽浪ひいては中国と伊都国の交流を意味し、後者すでにこの頃九州で、通商のため文字を用いる人が居たことの証左になります。



平原1号墳丘墓主体部柱穴列

9. 丸隅山古墳

5世紀前半に築造されたと考えられる墳長85メートルの3段築成の前方後円墳で、格段のテラス部には埴輪が巡っていたようです。

後円部に初期横穴式石室があり、入口は無くなってしまったようで現況はコンクリートで固められています。玄室内には、辻田淳一郎氏が連結石棺と呼んでいる珍しい形式の松浦砂岩製の組合せ式箱式（写真下）が埋納されており、傍製神獸鏡、巴形銅器などの副葬品の他人骨が発見されています。



石棺は、3枚の長側板と4枚の短側板（木口）で構成され、組合せ式箱式石棺を二つ合わせた形になっています。おそらく石棺を二組設置するのを簡略化したものと考えられます。最初から同じ大きさの棺を二つ並べるのは、追葬というより、一墳複数埋葬の思想で、谷口古墳が石室を二つ作りそれぞれに同じような長持形石棺を設置する考えに近いもので、横穴



式石室を採用しながら、前代の竪穴式石室の埋葬思想を引きずっているように思えます。

石棺の蓋石の幅は棺身の幅より狭いのは、棺身の幅に見合う材料の入手が困難だったためだと思います。よく見ると蓋石の頂部は緩やかな円弧を描くように丁寧に加工されています。実は、このような加工を施したものが奈良県の和邇下神社古墳にあります。和邇下神社古墳の方は竪穴式石室の蓋石の様です。また詳しいことは省略しますが、柳沢一男氏や、辻田淳一郎氏によれば、石材の加工法、組合せ方に谷口古墳の長持形石棺との共通点も見られることから、長持形石棺工人の関与で製作されたものの様です。私は棺の設置方向も気になります。石室の主軸と石棺の主軸が並行で、後の九州型横穴式石室とは異なることです。（後のものは直交が主流）

横穴式石室という外来の新しい埋葬施設を採用しながら、畿内型の埋葬思想から未だ脱却し切れていない時期の古墳ということになるでしょう。

<参考>

和邇下神社古墳石室蓋石

